

# 升屋の蔵版目録と出版

——浮世草子末期における書肆升屋の動向(三)——

山 本 卓

## 一 はじめに

宝暦末から安永頃の大坂書肆、升屋(のち書物屋、渋川大蔵八彦太郎▽・久蔵)は、文学史の変遷期にあって、時代の一つの典型ともいふべき動向を示す書肆である。本稿では、先ず、知り得たこの書肆の出版物を簡単に年表にする。次に、巻末付載の蔵版目録は書肆の出版活動を探る有効な資料と思われるので、これを列挙する。そして、これらを手掛かりに升屋の動向を窺うこととする。尚、これら升屋の出版調べは前稿で述べた作者や絵師の問題の資料でもある。

## 二 出版略年表

。この年表は、升屋(のち書物屋)が板元の出版物、及びそう推

定されるものを、刊行年月順に列記する。

。原本を確認できたものだけでなく、【享保】大阪出版書籍目録

(以下、「大阪書目」と略す)を中心に、「【享保】江戸出版書目」

(以下、「江戸書目」と略す)・明和九年刊「増大書籍目録」(以

下、「明和書目」と略す)・升屋の蔵版目録(後掲)等で確認

できるものも含めた。(その際、未見と断わる。)但し、升屋の

蔵版目録のみに拠ることは、原則として避けた。

。升屋が求板し、元版と同名で再印したものは除いた。(その他、

再印本は省略)

。浮世草子については、近時長谷川強氏「浮世草子考証年表」——

宝永以降」(『日本書誌学大系42』・以下「考証年表」と略す)

が刊行されたので、重複して掲げず、その頁数だけを記した。

同様に、軽口本・嘶会本については、武藤禎夫氏「嘶本大系」

の巻数、又は「未題上方咄会本六種」(以下、「上方咄会本」と略す)を示した。

。記載は、原則として書名(原則として内題による)・版型・冊数・著者・絵師・刊記・その他特記事項の順としたが、未見の場合は升屋の板行と推定する根拠を略記した。

宝暦十一年十一月刊

役者五志喜目鏡 横三冊

刊記「宝暦十一年〃己十一月吉日〃大坂書林〃升屋大蔵〃田原屋伝蔵」。「児鍛甲州軍記」今昔風氣質等の予告があるので、升屋の出刊と思われる。

宝暦十二年正月刊か

軽口東方朔

「断本大系」第八巻

宝暦十三年正月刊

軽口太平楽

「断本大系」第八巻所収「軽口豊年遊」の解題の項に解説に「軽口豊年遊」(宝暦四年序)を求板し、改題したものである。

同年五月刊

諸札手引種 縦小本一冊

「江戸書目」に「諸札手引種墨付五十六丁小本一冊〃同年(宝暦十三年)五月〃澁川大蔵作大坂板元 澁川大蔵〃売出 吉文字や次郎兵衛」とある。ただし、「大阪書目」(同年三月出願)には「作者 澁川太蔵(順慶町五丁目)〃板元 河内屋茂兵衛(鋸屋町)」とある。所見本は後刷で、その刊記は「宝暦十三年未五月吉且〃大坂書林〃心斎橋筋石原茂兵衛〃(空白)〃一行削ったか〃」。後の升屋の蔵版目録にも見えるので、升屋の出刊・蔵版と思われる。(但し、升屋一肆か否かは知らない。)

同年刊か

源氏番之図双六 一枚刷 村上至栄画か

未見。「大阪書目」(宝暦十二年十月申出)に「画工 村上至栄(南久太郎町三丁目)〃板元 升屋大蔵(金沢町)」とあり、明和書目や升屋蔵版目録にも見えるので、確かに出刊されたのであろう。(升屋目録では「香之園風流源氏双六画工村上至栄」)

伊勢物語教訓文 二冊 長谷川光信・北尾雪坑画か

未見。「江戸書目」に「墨付四十八丁全部二冊〃宝暦十三年〃画工 長谷川氏〃板元 大坂澁川大蔵〃売出 鱗形屋孫兵衛」。「大阪書目」(宝暦十三年十月出願)によると「花王伊勢物語」の改題・改編本。(元板三冊を二分割し、口絵を彫り足す。)明和書目や升屋蔵版目録にも見える。

伊勢物語女訓大全 一冊 長谷川光信・北尾雪坑斎画か

未見。「大阪書目」に先の『伊勢物語教訓文』と併記されている。同様の改題・改編本。明和書目・升屋蔵版目録にも見える。

宝暦十四（明和元）年正月刊

繪本源氏山 三冊 月岡丹下面か

未見。「江戸書目」に「墨付卅四丁全部三冊／同（宝暦十三）年正月

／画工 月岡丹下／板元 大坂渋川大蔵／売出 鱗形屋孫兵衛」。

「大阪書目」（宝暦十三年九月申出）によると、「繪本泰平楽」

の改題本。明和書目・升屋蔵版目録にも見える。

同年刊か

風流艶双六 折本一冊 北尾雪坑斎画か

未見。「江戸書目」に「折本一冊 墨付尺長武枚／宝暦十四年／画工

雪坑斎／板元 大坂渋川大蔵／売出 鱗形屋孫兵衛」。升屋蔵版

目録に見える。

今昔諸国はなし

「考証年表」一五二頁。

小幡太平楽 一冊

未見。「大阪書目」（宝暦十三年九月申出）によると「嶋塚小韻」

の改題板行。明和書目に「小韻泰平楽（二冊）」として見えるも

のか。升屋蔵版目録では「新撰小韻太平楽」。

明和二年刊か

勸化翼

未見。「大阪書目」（明和元年十一月出願）では桂樹菴等觀を作

者としている。（五冊）明和書目には（三冊）勸山を作者として

見える。ただし、升屋蔵版目録には見えない。

明和三年正月刊

中興武家盛衰記 大十七卷十五冊

森治郎右衛門序。刊記「明和三丙年正月／大坂御書物所心齋橋通

豊町角 渋川大蔵」。「松寿堂蔵板書籍目録」二丁半を付す。「大阪

書目」（明和元年十一月申出）によると、「武家勲功記」の改題

板行。

明和四年正月刊か

花鏡はなかがた潜水鏡

「考証年表」一五六頁に「女俠築花形」の改題本という。

同年九月刊

彩色画選 大一冊 北尾雪坑斎画か

刊記「明和丁年九月／阪陽御書物所心齋橋通豊町角 渋川大蔵／洛陽

書肆堀川通光寺下ル 河南四郎右衛門／武陽書肆 日本橋南三丁目須原平

祐」。升屋蔵版目録に見える。

明和五年三月刊

加古川本紳綱目

「考証年表」一五八頁。刊記は上総屋になっているが、升屋の板行という。①

女今川教文 大一冊 北尾雪坑齋画

「江戸書目」に「奥付三千丁全一冊／同子（明和五年）三月／板元大板 渋川彦太郎／売出 須原や平助」。所見本は後刷の安永七年菱屋版であるが、刊記以外はそのままで、本文末識語中に北尾雪坑齋画、長友松軒筆、丁亥（明和四年）孟春とする。

明和六年刊か

上難波宮祭礼行列記 一冊 竹原春朝齋画か

未見。「大阪書目」（明和五年六月出願）に「画工作者 亀屋門

二郎（伏見屋四郎兵衛町）。明和書目・升屋蔵版目録に見える。

明和七年正月刊

世間化物質氣

「考証年表」一六一頁

同年八月刊

神翁選（神易選） 縦小本一冊 卜部尚因著、竹原春朝齋画か。

刊記「明和三丙年九月御免／明和七戊戌年八月新刻／坂陽書肆／

高風栞二丁目 浅野弥兵衛／同丁野村長兵衛／心齋橋南二丁目角 渋川彦太

郎」。松寿堂蔵板書籍目録「二丁半を付す、口絵があるが、画

風から春朝齋と思われる。

明和七年刊か

大橋流今川 一冊

未見。「大阪書目」（明和七年二月出願）には、筆者を篠田休次とする。明和七年版升屋蔵版目録に「今川大橋流再板篠田先生真跡」とあるのと同年の板行か。ただし、宝暦書目に「大橋流今川篠田」とあるものの求板本やも知れない。

北条五代実記 大十巻十冊

「大阪書目」（明和七年閏六月申出）に「五代北条実記」として「北条盛衰記」を改題板行という。所見本は、天明三年三月購版河内屋版であるが、明和七年版升屋蔵版録目に見える。

明和八年正月刊

世間傾城質氣

「考証年表」一六七頁。「傾城太々神楽」の改題改竄本。

同年九月刊

故事簿秘集 大五巻五冊

「大阪書目」（明和八年五月申出）に「東湖隨筆」の改題板行の旨。板元は、河内屋茂兵衛と升屋彦太郎の二肆。所見本は後刷の池田屋版であるが、刊年は「明和八年卯歳九月良辰」とそのままに、書肆名を入木。升屋蔵版目録に見える。

同年刊か

案綴論 一冊 王羲之か

未見。「大阪書目」(明和七年閏六月出願)には筆者を王羲之一とする。明和書目に見える。

明和九(安永元)年正月刊

世間自慢顔

「考証年表」一六八頁。

怪談記野狐之名玉 半五巻五冊 谷川琴生系(細工人作者)

刊記「明和九辰正月吉且細工人作者谷川琴生系/書林/大坂心齋橋南五丁目角升屋彦太郎版/京都御幸町通御池下ル菱屋孫兵衛版/大坂御堂筋

瓦町南江入ル和泉屋幸右衛門版」

同年正月刊か

繪本鎌倉山 三冊 竹原春朝齋面か

未見。「大阪書目」には、作者を竹原春朝齋とし明和四年十月の出願であるが、明和九年正月刊「世間自慢顔」巻四末に「繪本鎌倉山竹原春朝齋面全三冊」とし「当春の新板に出し申候」とあるので明和九年正月刊であろう。明和書目、明和九年版升屋藏版目録に見える。

同年三月刊

財宝速書伝 中一冊 後々栄軒(半井)金陵著

刊記「明和壬辰三年三月/御書物所大坂心齋橋南二丁目角波川彦太郎梓」  
桜御殿郎那の枕

「考証年表」一七三頁に、「頼朝三代鎌倉記」の改題改竄本。

同年刊か

住吉社細見絵図 一帖 竹原春朝齋面か

未見。「大阪書目」(明和八年六月出願)に「住吉細見絵図一冊/画工 竹原春朝齋」とある。「出勤帳」の安永元年六月三日の項に升屋彦太郎の一札があり、そこに「私先達板行仕候住吉社細見絵図……」とある。升屋藏版目録にも「住吉社細見絵図」とある。

同年出願

初心用文章 二冊 高橋健蔵か

未見。「大阪書目」(明和九年二月出願)では、筆者を高橋健蔵とする。刊否不明。

安永二年正月刊

分限玉の礎、半一冊 杜健翁(半井金陵)著

「大阪書目」(明和九年六月出願)に作者半井金陵とする。刊記

「安永二年/正月吉且/大坂心齋橋筋町西田理兵衛/同心齋橋博勞

町保武田伊右衛門/同江戸堀二丁目平瀬新右衛門/同心齋橋南二丁目角波

川彦太郎/寿梓」

安永二年四月刊

## 役者報恩経 折本一冊

未見。「江戸書目」による。升屋藏版目録には「役行者報恩経」。

同年十一月刊

本朝人相考 中三冊 郭西翁口授・仙掌齋撰

刊記「明和九<sup>壬</sup>年六月官許／安永二<sup>癸</sup>年十一月彫刻／書林／江戸本

石町三丁目十軒店山崎金兵衛／大坂心齋橋南五丁目松村九兵衛／同深木町

渋川久藏」。挿絵の人相の図は春朝齋のようにも見えるが不明。

安永二年又は三年刊か

西国略打順礼記 一冊 大文字屋宗然

未見。「大阪書目」(明和九年十月出願)では、作者大文字屋宗

然、板元は大文字屋と升屋との二跡。升屋藏版目録に見える。

絵本哥字尽 二冊か 北尾雪坑齋画

「大阪書目」(明和九年十一月出願)に、「絵本浦千鳥」の改題

板行。所見本は写本で刊記無し。

女国尽教紳 一冊 甲谷伝左衛門か

未見。「大阪書目」(明和七年十一月出願)に作者甲谷伝左衛

門。升屋藏版目録の明和九年版では近刻、安永四年版は既刊。

画本錦囊箋 十冊 竹原春朝齋画か

未見。升屋藏版目録の明和七年八月版に竹原春朝齋画とし、明和

九年版では近刻、安永四年版は既刊。

安永三年正月刊

富貴の地基トキ 半一冊 壮健翁(半井金陵)著

「大阪書目」(安永二年十一月出願)によると作者半井宗治、板

元千種屋(樋口)万藏。刊記「安永三<sup>甲</sup>年正月吉旦／大阪書林／土

佐堀巻丁目樋口万藏／心齋橋尾町西田理兵衛／茨木町渋川久藏」

同年九月刊か

救病不邪秘方 一冊 早齋主人か

未見。「江戸書目」に「牧<sup>ウツ</sup>不邪秘方巻付五十二丁全一冊／同三(安

永三年)九月／早齋主人／板元 書物屋久藏／売出 須原屋茂兵

衛」。「大阪書目」(安永三年六月出願)では、出願時「救病不

邪秘方」作者辻林喜右衛門、板元田原屋平兵衛。升屋藏版目録に

も「救病不邪秘方」。

同年刊か

投算早卜筮 一枚 高橋健藏か

未見。「大阪書目」(安永二年二月出願)では、作者高橋健藏、

板元蘆屋弥兵衛となっているが、升屋藏版目録に見える。

伊勢道中記・北国筋道中記・江戸道中記・西国筋道中記

未見。「大阪書目」(安永二年七月申出)に「大道中記」を四種

に分け板行。升屋藏版目録に「伊勢道中綱目大全」と「北国筋道

中記」は見えるが、他は刊否不明。

安永四年二月刊

本朝千字文 大一冊 貝原益軒遺稿 戸川後学傍注。竹原春朝齋画か

刊記「安永四年二月／大坂番肆心齋橋屋 田原屋平兵衛 弘／御

書物所賣木町書物屋久藏 梓」。蔵版目録半丁を付す。画風から春

朝齋の挿絵と思われる。

同年刊か

本朝(素隠)千字文 一冊

未見。『大阪書目』(安永三年三月出願)に『本朝千字文』筆者

出口与三左衛門として見えるものか。『立春嘸大集』(君竹撰)

巻一末に『本朝千字文傍注』と併記し「両板出来」とある。升屋

蔵版目録にも『本朝千字文』に傍注本と素説本の二種が見える。

安永五年正月刊

年忘嘸角力

『嘸本大系』第十巻。

同年四月刊

立春嘸大集

『嘸本大系』第十巻。

同年七月刊

夕涼新話集

『嘸本大系』第十巻

安永六年正月刊

順会咄献立

『上方咄会本』

知恵競咄揃

『上方咄会本』

新撰咄番組

『上方咄会本』

時勢話大全

『嘸本大系』第十一巻。

時勢話綱目

『嘸本大系』第十一巻。

同年刊か

本朝千字文石摺

未見。『大阪書目』(安永五年六月出願)に筆者正月堂。『時勢

話大全』巻四末に「同(本朝千字文) 楷書石摺 全二冊」。

### 三 蔵版目録

。升屋(書物屋)の出版物の巻末付載蔵版目録で、知り得たものは全て収めた。

。刊記の位置にない類書目録・予告等は省いた。

。冊数は省略し、( ) は近日出来・近刻とあるもの。  
。原則として、著者・絵師名のあるものは付記した。  
。『軽口太平楽』『年忘嘶角力』付載のものは、武藤禎夫氏のこ  
教示による。

。『中興武家盛衰記』『神易選』付載のものは、書名の後に簡単  
な解題が付されているが、これを省略した。  
。振り仮名のあるものもあるが、これを省いた。

宝曆十三年正月版蔵版目録 (『軽口太平楽』付載)

- 軽口東方朔 絵本鞍の詞
- 軽口豊年遊 絵本言花競
- 軽口太平楽 風流糸花形
- (軽口地桜) 児鑑甲州軍記
- (軽口虚言葉) (今昔蟲屋質氣)

宝曆十三年未正月吉日

大坂書林 升屋大蔵

宝曆十四年正月版蔵版目録 (『軽口東方朔』付載)

- 絵本源氏山月岡丹下 新撰小謡太平楽
- 同泰平楽月岡丹下 軽口東方朔
- 同万歳松 同太平楽

女中 風俗競双六 同豊年遊

今昔諸國噺 児鑑甲刃軍記

(世間自慢質氣) 女伊達競雛形

風流源氏双六

宝曆十四<sup>甲</sup>年正月吉日

大坂御書物所 心齋橋通扇町 渋川大蔵

明和三年正月版蔵版目録 (『中興武家盛衰記』付載)

(一画) 坂陽御書物所 心齋橋通扇町角 渋川大蔵

松寿堂蔵板書籍目録

秋間<sup>あきま</sup>戯<sup>あそび</sup>鉄 (密中散文集) (註<sup>註</sup>傷寒論本義) (金匱要略註釈

本義) 口<sup>口</sup>坂<sup>坂</sup>古<sup>古</sup>神<sup>神</sup>易<sup>易</sup>選<sup>選</sup>新<sup>新</sup>井<sup>井</sup>貞<sup>貞</sup>翁 (同統篇) 同 百人女郎 風俗艶双六

北尾曾<sup>曾</sup>坑<sup>坑</sup>齋 香<sup>香</sup>之<sup>之</sup>園 風流源氏双六 村上<sup>村上</sup>圭<sup>圭</sup>來

(二画) 初遊いろは双六 北尾曾<sup>曾</sup>坑<sup>坑</sup>齋 本朝諸家家臣伝馬場<sup>馬場</sup>信<sup>信</sup>武 武家勲功

記同 中興武家盛衰記 森治<sup>森治</sup>郎<sup>郎</sup>右<sup>右</sup>衛<sup>衛</sup>門 北条時頼<sup>時頼</sup>記<sup>記</sup>馬場<sup>馬場</sup>信<sup>信</sup>武 今川<sup>今川</sup>状

池田<sup>池田</sup>松<sup>松</sup>齋 女筆初瀬川<sup>初瀬川</sup>長谷川<sup>長谷川</sup>妙<sup>妙</sup>貞 (女筆倭朝廻) 同 女尺<sup>尺</sup>統<sup>統</sup>艶<sup>艶</sup>文箱

長友<sup>長友</sup>松<sup>松</sup>軒 (百人一首日本大全) 北尾曾<sup>曾</sup>坑<sup>坑</sup>齋 (文華百人一首女教

大全)

(三画) 花王伊勢物語<sup>伊勢物語</sup>繪抄<sup>繪抄</sup> 長谷川<sup>長谷川</sup>光<sup>光</sup>信 伊勢物語<sup>伊勢物語</sup>教訓<sup>教訓</sup>文同 伊勢物語<sup>伊勢物語</sup>女

訓<sup>訓</sup>大全同 女今川<sup>今川</sup>教<sup>教</sup>文<sup>文</sup>貞<sup>貞</sup>原<sup>原</sup>篤<sup>篤</sup>信 絵本源氏山月岡丹下 絵本泰平

楽同 絵本双葉種<sup>双葉種</sup>北尾曾<sup>曾</sup>坑<sup>坑</sup>齋 諸礼<sup>諸礼</sup>手<sup>手</sup>引<sup>引</sup>種 同統編 同後篇 同



拾遺 折形手引種

(四面) 新撰小飄太平楽 六々色紙形尊朝親王 教訓今川状大橋先生 滝

本今川状堀く繪 今川教訓状堀流水軒 輕口東方朔形の先生 同太

平楽自楽 同豊年遊自楽 同空言紫並木正三 今昔諸国噺自楽

当世智恵鑑 風流祭花形 能楽惣教訓容気 光源氏時勢姿

花鏡清水詣 当世司質気

(五面) 世間風眞質気 今昔自慢形気 当世芸者容気 浮世学者質気

時勢富貴形気 卦本品々 宛誓伝 後藤感状記

明和四年正月刊記蔵版目錄

(1) 『百合稚錦鶴』・『楠軍法鑑椽』付藏

(二面) 風流扇軍

北条時頼二女椽

(光源氏時勢粧)

善悪身持扇

三浦大助節分寿

右大将鎌倉夷記

(風流神代卷)

(兒鏡甲州軍記)

曠太平記

(二面) 楠軍法鑑椽

雷神不動椽

薄雪音羽流

風流日本莊子

契情太平記

大系凶蝦夷噺

弓張月曙椽

(曾呂利御伽物語)

阿酒浦三巴

今昔出世扇

勸進能舞台椽

花楓劔本地

小野皇恋(二)釣舟

頼信班軍記

道成寺岐柳

優源平歌袋

夕霧有馬松

百合稚錦瓦

堀浦女見台

歳徳五葉松

風流川中島

教訓私儘育

本田善光倭丹前

逆沢瀉鑑鑑

風流御伽曾我

風流東鑑

頼朝三代鎌倉記

西海太平記

中将姫誓糸遊

(三面) 今川一睡記

風流庭訓往来

風流宇治頼政

於国歌舞妓

風流東大全

奥州軍記

長生伏木隠

万福富貴自在

今昔九重椽

(四面) 契情蓬萊山

陽炎日高川

富士浅間裾野椽

菜花金夢合

頼政現在蛸

御伽太平記

(当世司形気)

(教訓能楽形気)

(当世芸者形気)

(浮世学者形気)

南木琴日記

世間長者形気

(時勢富貴形気)

(世間風眞形気)

(今昔自慢形気)

善悪面而常盤樂

忠孝寿門松

丹波与作無間鐘

武遊双級巴

忠盛祇園椽

竜都俄系凶

魁対盃

敦盛源平桃

柿本人丸誕生記

花鏡清水詣

大内裏大友真鳥

板元

大坂心斎橋南二丁目角 升屋彦太郎

出世握虎昔語

菊童二面鏡

彩色歌相撲

売所

京寺町通押小路下ル 金屋治助

本朝会稽山

女非人綴錦

盛久側柏葉

同

江戸日本橋通二丁目 吉文字屋治郎兵衛

名玉女舞鶴

記録留我

十二小町囃装

(3)「大内裏大友真鳥」付載

楠三代壮士

真盛曲輪錦

昔女化粧桜

(二面) 分里艶行脚

風流艶照君

風流艶平家 男女伊勢風流

御伽平家

(教訓廓馴語)

義貞鎧軍配

風流艶照君

義経風流鑑

愛敬昔色好

(五面) (当世歎背物)

(起揚小法師)

明和四丁年 / 正月

板元

大坂心斎橋扇屋町角

升屋大蔵

加古川本陣綱目

売所

京寺町通押小路下ル

金屋治助

……右之本來子の正月二日分出……

同

江戸大伝馬町

鱗形屋孫兵衛

※ただし、「精立法鑑按」では一・二面と三・四面が逆。

(2)「教訓私儘育」・「女将門七人化粧」付載

(二面) (1)本の(一)面に同じ。

(二面) (1)本の(二)面に同じ。

(三面) (1)本の(三)面に同じ。

(四面) (1)本の(四)面に同じ。

(五面) (当世歎背物) (起揚小法師) 世間化物質氣

(当世情質氣)

明和四丁亥年 / 正月

(二面) (1)本の(一)面に同じ。

(三面) (1)本の(二)面に同じ。

(四面) (1)本の(三)面に同じ。

(五面) (1)本の(四)面に同じ。

(六面) (2)本の(五)面に同じ。(書肆名も同じ)

明和七年正月版蔵版目錄(「世間化物質氣」付載)

(二面) 明和四年刊記(1)本(三面)に同じ。

(二面) 同 (四面)に同じ。

(三面) 同 (一面)に同じ。

(四面) 同 (二面)に同じ。

(五面) 同 (8)本(二面)の「分里艶行脚」以下「風流西海視」までの十二部は同じ。その後

(当世鐵背物) (起揚小法師) 加古川本師綱目

(世間化物質氣) (世間自慢顔)

売所の二肆は次の通り。

売所 京御幸町三条通上ル町 秋田屋忠兵衛

同 江戸日本橋通三丁目 前川六左衛門

同年八月版蔵版目録(「神易選」付載)

(二面) 大坂御書物所しんさいし南丁目角ますや 渋川彦太郎

松寿堂蔵板書籙目録

可扶占神易選新井先生 當物神易選新井先生 (本朝人相考) (和漢類)

繪本錦囊筭) 竹原春朝斎

(二面) 彩色面選留坑斎 (彩色面誌) 繪本源氏山月園丹下 (繪本鎌倉

山) 竹原春朝斎 北条時頼記 北条五代表記 中興武家盛衰記

後藤感狀記 女中風俗艶双六北尾智坑斎

(三画) 風流源氏双六 和漢三休朗詠集玉麗茂八 新增古状揃 教訓今

川状大相先生 今川篠田先生 六々御色紙形尊朝親王 (字林用文

悉改綱目) 女筆初瀬川兵衛妙貞 (女尺統艶文箱) 大寺社順拜

記 上難波宮祭礼大行烈記 新撰小謡太平楽 諸礼手引種

(四画) 花王伊勢物語繪抄 いせ物語教訓文 伊勢物語女訓大全 (百

人一首九重錦) 女今川教文林近春先生 (女国尽教紳) 大船

節用字林大成 大象節用集大家蔵 かる口咄東方朔並木正三

輕口噺太平楽

(五面) 哇紙箋本色々 読本類 世間化物氣質 世契情氣質 (世間

自慢顔)

明和八年(推定) 版蔵版目録(「那智御山手管漚」付載)

(二面) 明和四年刊記(1)本(三画)に同じ。

(二面) 同本(四画)に同じ。

(三画) 同本(二面)に同じ。

(四画) 同本(二面)に同じ。

(五面) 明和七年正月版の(五面)と比べて、「世契情氣質」が既刊

になっていることと、京の売所が「京都寺町通松原下町 梅村市

兵衛」となっている他は、全て同じ。

※ただし同書一本付載目録には、(二面)明和四年刊記(1)本(四画)に同じ、

(二面)同本(二面)に同じ、(三画)同本(二面)に同じ、(四画)同本(三画)に同じ、(五面)明和四年刊記(3)本(一面)に同じの如く取り合わせたものがある。

明和九年正月及び三月版蔵版目録(「世間自慢顔」「考証年表」一

六八頁・「桜御殿部郡の枕」付載)

(二面) 可扶占神易選

(當物神易選)

(繪本錦囊筭)

彩色面選

中武家盛衰記

北条時頼記

(本朝人相考) (彩色面誌)

後藤感狀記

町坂古神易遷  
屯卜古

女筆初瀬川

救病不邪秘方

大寺社順拜記

絵本源氏山

北条五代実記

投算早卜筮

女国尽教紳

役行者報恩経

被<sup>上</sup> 祭礼大行列記

絵本鎌倉山

故事落穂集

本朝人相考

女今川教文

住吉社細見絵図

住吉社細見絵図

(絵本姿名定)  
(絵本寿紳)

本朝千字文員原先生  
新材料献立

本朝千字文傍注かな付  
兼原本

吾妻路名所玉章

西国路打順礼記

(二画) 諸礼手引種

女筆初瀬川

女中風俗艶双六  
品定

中興武家盛衰記

彩色面遊

伊勢道中綱目大全  
北国筋道中記

(寺子万宝全書)

(女国尽教紳)

風流源氏双六

北条五代実記

絵本五常訓

さいの河原和讃

大船節用字林大成

女尺説艶文箱

いせ道中廻双六

分限玉の礎

故事落穂集

世間自慢顔

大象節用大家蔵

女今川

断小謡太平楽

富貴の地基

画本錦鏡笠

六々御色紙形

女今川教文

かる口咄東方朔

安永四乙未年二月

今川無田

伊勢物語教訓文

軽口噺太平楽

大坂書肆 心齋橋堀町田原屋平兵衛 弘

教訓今川状大箱

花玉いせ物語

薄雪物語

御書物所 茨木町 書物屋久蔵 梓

新增古状抽

(伊勢物語女訓大全)

(新撰薄雪物語)

安永五年正月版蔵版目録(「年忘断角力」付載)

(字林用文悉改綱目)

(百人一首九重錦)

(恋の文づくし)

御書物所 大坂心齋橋將勢町  
登下町茨木町 渋川久蔵

(三画) 明和四年刊記蔵版目録(1本(三画)に同じ。

(四画) 同本(四画)に同じ。

(五画) 同本(二画)に同じ。

(六画) 同本(二画)に同じ。

(七画) 明和八年版蔵版目録(五画)に同じ。(書肆名も同じ)

安永四年二月版蔵版目録(「本朝千字文」付載)

興文館蔵板書籍目録

とありその後、三段の書目、安永四年版と比べると、上段三列目まで同じ、四列目が「本朝千字文傍注かな付」、五列目が「素説本朝千字文」となり、その後、「本朝古太平記」(近刻)、「中興武家盛衰記」、「北条五代実記」、「分限玉礎」の順、中段三列目まで同じでその後「彩色面遊」「故事落穂集」「世間自慢顔」「年

忘嘶角力」「立春嘶大集」「富貴の地基」の順、下段は「世間自慢顔」の二段目への移動の他は、そのまま。

#### 四 升屋の動向

ここで、前掲の蔵版目録等を手掛かりに、順次升屋（書物屋）の動向を窺うことにする。先ず創業時期であるが、「近世書林板元總覽」に、升屋大蔵の最初の出版として、延享四年「伊勢物語絵抄」を挙げるのは、大蔵（彦太郎）の没年<sup>⑧</sup>から逆算して不自然である。この書は升屋が求板したものの（前掲「二出版略年表」参照。以下同様の場合、「年表」とのみ記す。）で、その再印にあたり、元版の刊年「延享四年」をそのままに、書肆名のみを自家に彫り変えたものではなからうか。升屋は、軽口東方朔「出願の宝曆十一年、又はそれよりいくらかも溯らない頃の創業と考えておく方がよいのではなからうか。

それから間もない宝曆十三年正月現在の出版状況を前掲の蔵版目録で見ると、軽口本三種の既刊と二種の予告、絵本二種の予告、浮世草子二種の既刊と一種の予告がある。この内、「軽口豊年遊」は求板、「軽口太平楽」はその改題本（年表）、「軽口姥桜」は「小説年表」に宝永三年刊とあり、求板本と思われる。「絵本宮花競」は「大阪書目」（宝曆七年四月出願）に、「板元 本屋嘉兵衛」とあり、「風流象花形」は宝曆四年刊「女俠象花形」である<sup>⑨</sup>から、共に

求板と思われる。「軽口虚言紫」「絵本鞍の詞」「児鎧甲州軍記」「今昔風質氣」は刊否を知らない。こうして見ていくと、この時点で升屋自前の出刊が確実なものは「軽口東方朔」だけで、他はほとんど求板、又はその改題である。草創期の升屋の出版は、この程度の状態であった。又、そのジャンルは、軽口本・絵本・浮世草子の三種であるが、その内で軽口本に力を入れている如くである。

次の宝曆十四年正月版蔵目録になっての増加分を見ると、「絵本太平楽」は宝曆十一年刊<sup>⑩</sup>の求板本、「絵本源氏山」はその改題本（年表）、「今昔諸國嘶」は「当世はつ鑑」の改題本（年表）、「新撰小瓢太平楽」は「島台小瓢」の改題本（年表）である。「女伊達競雛形」は、升屋が求板した「女俠象花形」<sup>⑪</sup>の改題本と思われる。やはりこの時点でも、求板或いはその改題が多いことに変わりはない。そしてその求板（改題）によって、従来通り軽口本・絵本・浮世草子を主力出版物としているが、ここに至って新しく双六を導入している。「風俗競双六」「風流源氏双六」とも未見であるが、後の升屋の蔵版目録にも見えるので確かに板行されたのであろう。双六は一枚刷の軽微なものであるので、出版に要する費用も少なく、容易に出版できよう。まさかこれまでは求板ではなからうと思われる。又近刻の「世間自慢質氣」は、明和九年に至り出刊を見る「世間自慢顔」のことであろう。そうすれば、既にこの時点で、気質物

浮世草子の自家板行への意欲の芽生えぐらいは認められよう。

その後明和元年に至り本屋仲間の行司を勤めている。「出勤帳」によると、明和元年九月二十一日から同二年正月二十一日迄、升屋大蔵が行司となっている。「出勤帳」は明和元年（宝暦十四年）正月から記録が始まるのでそれ以前は不明であるが、創業から数年以内にはやくも行司を勤めることになったらしい。但しこれ以後、「出勤帳」には行司としては見えない。

明和三年正月版蔵版目録は、明和四年に八文字屋本版木が入る直前の升屋の姿を窺える。「本朝諸家家臣伝」は、正徳六年刊「諸家勲功記」の求板であろう。「武家勲功記」は、享保書目に同名で十五冊として見えるもののこれも求板であろう。「大阪書目」に、同書を「中興武家盛衰記」と改題板行の旨申出がある（明和元年十一月申出）。「北条時頼記」は、元禄四年刊本の求板、「花王伊勢物語」も享保六年刊長谷川光備画の求板本、絵師を「長谷川光備」としているの、口絵の彫り足しは雪抗斎の手になるらしい、「伊勢物語教訓文」「伊勢物語女訓大全」はその改題改編本（年表）。「六々色紙形」は宝暦九年刊の、「当世智恵鑑」は正徳二年刊のそれぞれ求板本。「風流築花形」は、宝暦四年刊の「女俠築花形」の別名故求板、「花鏡清水詣」はその改題（年表）。「後藤感情記」はそこに付された解題によると、「中興武家盛衰記」の巻十二・十三のみを

別名で板行したものであるという。升屋は「武家勲功記」を求板し、そのままの書名で再印し、そして「中興武家盛衰記」と改題板行し、更にその一部分を別名で出刊しているわけである。升屋が求板本を非常に効率よく利用している一例である。又、この時点においても、求板・改題板行が多いことには変わりはないようだ。尚、「神易選」は明和七年刊（出願は明和三年九月）であるが既刊としている等、この目録では相当数の未刊本を既刊の如く扱っており、この点相当杜撰である。ところで、この蔵版目録に至り、往来物等の教養書・実用書類が多数導入されている。又、軍記類も目につく。このようにこの期になると、升屋の出版も相当充実して来た模様である。そして浮世草子を見ると、従来通りの求板・改題のやり方のもものでは、「当世智恵鑑」「風流築花形」「花鏡清水詣」がある。一方「能楽猿教訓容気」は明和五年に至り出刊を見る。「加古川本紳稱目」と思われる<sup>⑤</sup>し、「当世司賀気」以下六部は後の升屋蔵版目録でもずっと近刻になっているものであるが、この時点で既に自前の浮世草子を出刊する計画が窺える。この年の升屋は、いよいよ浮世草子に力を入れようとしていた時期であったのだろう。まさに、このような状態の升屋に翌明和四年、八文字屋本の版木が入ることになる。

明和四年八文字屋本の求板再印本付載の蔵版目録には問題がある。管見では、明和四年正月の刊記になっているもの三種、無刊記

のもの一種があった。明和四年正月刊記の三種の中においても、二丁分の八文字屋物説本類目録の部分はそのままに、それに加えて三段階に増加している。この増加の様子から、これら三種の前後関係は、前掲明和四年刊記蔵版目録の(1)本、(2)本、(8)本の順と考えられる。ところが、三種とも明和四年正月の刊年月になっており矛盾する。そこで「正月」という点のみを無視すると、(3)の目録(一面)には『加古川本紳綱目』を来(る)子(年) (明和五年) 正月二日より出す旨の予告があることから、明和四年内に、三段階三種の目録に成長していったとすべきであろうか。しかし、そう考えても次の二点の疑義が生じる。一は、升屋大蔵は明和四年十月以降に彦太郎と改名した<sup>①</sup>が、大蔵名の(1)はよいが、彦太郎名の(2)・(3)は明和四年十月から十二月の内に二種の目録が出されたことになり、不自然である。第二に、升屋の浮世草子付載の蔵版目録は一年間同一のものを使用しているふしもあり<sup>②</sup>、一年間に三回も改変するとは考え難い点である。しかし、(3)には現然と来(る)子(年) (明和五年) 正月より出刊するとの予告がある。これを説明するには、次の如く考えてはどうか。升屋刊の八文字屋本で刊年のあるものは全て明和四年正月となっているのは、前稿に述べた如く、後の刷でも、八文字屋本入手の時を明記すべく、明和四年正月刊とし続けたと考えるのが穏当であろう。故に、(8)の来春年初出刊との予告も、その同版面にあ

る『分里艶行脚』以下十二部の八文字屋横本類を、升屋がこだわりつづけている明和四年の刊に見せ掛けるための小細工ではなからうか。この十二部の八文字屋横本類が、他に遅れて升屋に入ったことは中村幸彦氏が述べておられる<sup>③</sup>が、実はそれは明和五年以降ではなからうか。そうすれば、(2)・(3)の目録は明和五年以降のものと考えられる。以上の如く考えれば一応の説明はつくが、遅れて升屋に入った十二部の横本類を明和四年刊に見せ掛けるために、既刊の『加古川本紳綱目』をわざわざ未刊の如く予告するという小細工までするのかという疑問が残る。どちらにせよ、正しくは未詳とすべきであるが、とりあえず私に、(1)を明和四年版、(2)を同五年版、(3)を同六年版と考えておきたい<sup>④</sup>。尚、これら三種の目録に見える書については中村幸彦氏の考証<sup>⑤</sup>がある。

八文字屋本求板再印本の無刊記のもの(『那智御山手管漚』付載)を明和八年版と推定したのは、巻五本文末に「世間自慢頭」を来(る)辰(年) (明和九年) 正月二日より出刊する旨の予告があるからである。

明和七年八月版目録になると、例の八文字屋本の書名は見えない。かわりに「説本類」とある下に八文字屋本を求板した旨の口上があるだけである。これは、この目録の付載されている『神易選』が縦小本の版型で、従来の八文字屋物説本類目録板木をそのまま使

子以外が目につく。

用できないためであろう。しかし、或いはこれを八文字屋本の需要が振るわないための後退と見ることも不可能ではなからう。一方この目録では、書道の手本・往来物・節用集など教養書・実用書の方面での増加が目につくようになる。この頃から升屋の出版は徐々に軌道修正にはいることになる。それ以後、同年十月に大幅な改竄本『世契情賀氣』を出願、十一月には「怪談記野狐之名玉」「女国尽教紳」を出願する如くである。『怪談記野狐之名玉』は、宝暦頃から数多く出刊される奇談集で、時の流行に順応したものである。この書の出願時には升屋一肆が板元となっていた。ところが板行時には、菱屋・和泉屋との相合版で、しかも升屋の蔵版目録にこの書は見えないので、升屋の蔵版ではないようである。理由は不明ながら、このことはせつかく乗りかかった時流に、結局は乗り遅れた感がある。

明和八年に至っても、八文字屋本の求版再印本も出してはいたが思わしくなかったであろう。正月には先の『世傾成賀氣』を出刊する。但し、この書の改竄は商策上からと簡単に割り切れないほど大幅なものであった<sup>⑥</sup>。そして、以前から近日出来と予告して来た『世間自慢顔』（新作）を二月に出願する他は、その後同年の出願において、『女今川おしへ文』（二月）、『故事落穂集』（五月）、『住吉細見絵図』（六月）、『本朝千字文』（十一月）という浮世草

明和九年になると、正月に先の『世間自慢顔』を、三月には「桜御殿邸の枕」を板行するが、この二書付載の目録では冒頭の一部分を、易・絵本・今川・書道・節用集・双六などの類に費している。これまで浮世草子付載の蔵版目録に掲載されるのは、浮世草子等所謂読本類だけであったが、事ここに至ってはそうも言っておられないのであろう。思い切った処置に出た訳だ。又、『桜御殿邸の枕』などは、名の通った八文字屋本「頼朝三代鎌倉記」をわざわざ改題するばかりか、冒頭に時の流行に合わせた新補の一章を挿入することまでしているのである。しかし、結果は芳しくなかったであろう。その後升屋は、浮世草子を出願も新規の板行もしなくなる。ここにおいて、八文字屋本の再印は勿論、浮世草子の開版そのものにも、完全な見切りをつけたようである<sup>⑦</sup>。以後、同年三月『財宝速蓄伝』出刊をはじめ、升屋は、教訓書、道中記、往来物等の出版に転じている。

大抵の八文字屋本の版木を抱えながら、それを再印できない升屋は、ここでのような策を打ち出したのだろうか。『出勤帳』によると、明和九年正月から立て続けに「升彦々読本廻し呉候様ニ口上書出ル事」「升屋彦太郎方へ、諸かな物よミ本廻呉候様被頼候事」等と見え、安永二年五月まで続く。ここでいう「読本」「かな物よ



「ミ本」とは、浮世草子などの呼称、「廻し呉候」とは所謂「廻り本」を内覧させてほしいとの意であろう。即ち、他書肆が浮世草子等読本類を開板するにあたっては、升屋の版権に抵触する類板やも知れないので（即ち「差構」）、「廻り本」を内覧させて欲しいというのである。蔵版している大量の八文字屋本の版権で差構をつけ、相合版等に割り込めば、勞せずして利を得ることができよう。そこに目をつけた升屋は執拗にこの申し出を本屋仲間に行なっている訳だが、はたしてその目論見は成功したのであるか。それ以後の所謂読本類で、升屋が相合板に割り込んだ例を知らない。時流は既に進んでおり、この頃には八文字屋本に類似の出版などなかったであろう。万策尽きた形の升屋は、遂に安永二年十一月から八文字屋本を手放しはじめることになる<sup>④</sup>。そしてこの頃、升屋彦太郎は、久蔵に代を譲り、屋号も書物屋と改名させる。<sup>⑤</sup>

浮世草子を見限つてからの書物屋（元升屋）の出版状況を安永四年版蔵版目録で見ると、易・人相 三、往来物 五、教訓 三、繪本 三、細見・道中記 四、浮世草子 一、その他の読本類 三（近刻 一を含む）、不明 五となる。「世間自慢顔」の一書を除いて、完全に浮世草子から手を引いたことは蔵版目録にも現われており、この頃の主力出版物を一言でいえば教養書・実用書ということになる。この類のものは、大ヒットもなく地味なかわり、最も手堅い

出版物であったのだろう。明和九年三月「財宝速蕃伝」から安永四年二月「本朝千字文」までの期間、ほとんど教養書・実用書ばかりの出版で派手さはないが、年表からも明らかのように、毎年新版又は求板再印を続けており、この期、書物屋（升屋）にとって、低迷期というほどのことではない。主力出版物を、確実な教養書・実用書の類に変更することによって力を蓄えていた時期で、それは次の展開を期して状勢を見定めていた時期でもあったというべきであろうか。

このような時期に大坂では、安永三年冬から「嘶の会」が流行しはじめた<sup>⑥</sup>。彦太郎は久蔵に代を譲り隠居の身であったが、この嘶の会の主要な常連であったという。この関係からか、書物屋久蔵は安永五年正月に嘶の会一席目「年忘嘶角力」を出刊する。書物屋久蔵にとってこの嘶の会の流行は、まさに渡りに舟であったといえよう。八文字屋本一件では、時の流行を読み誤り苦汁を嘗めたのであったが、この嘶会本は好評を博したようで、その後も久蔵が独占的に続刊を板行している。ここで打った手は当たった訳である。このように嘶会本を順調に出刊し続けた書物屋であるが、安永六年正月、嘶の会七席目「時勢話綱目」出刊以後、八・九席目の予告はありながら、その刊否を知らない。七席目出刊をもって、続刊が立ち消えた模様である。又同時に、他の書の出刊も不明になる。突然、

何故であろうか。「出勤帳」同年五月廿日、交代申送り之覚の条に

一池田屋与兵衛廻り本、書物屋久蔵方ニ相滞、度々催促ニ参候得共、写本戻し不被申候間、行司ら其段申、渡し只候様被申出候事

と見える。家内に何か異変でも生じたのであろうか。その後、この書肆の消息を知らない。

(了)

注

- ① 「八文字屋本版木行方」(中村幸彦著述集5)
- ② 本稿(二)本誌前号所載。
- ③ 「考証年表」一三八頁。
- ④ 漆山又四郎氏「絵本年表」(日本書誌学大系34)第二卷七二頁。
- ⑤ 「考証年表」一五六頁。
- ⑥ 「加古川本舞綱目」目録題下に「我儘育後廻ノ教訓能案質おぼやかし」とある。
- ⑦ 注②前掲稿。
- ⑧ 明和九年正月刊「世間自慢顔」と同年三月刊「桜御殿郎郎の枕」の付載蔵版目録は全く同一である。但し、明和七年正月刊「世間化物質気」と同年八月刊「神易選」の付載目録は、版型

が違つたため別である。又「神易選」は物論浮世草子ではない。

⑨ 注①前掲論文。

⑩ 注②前掲稿の注⑨・⑩引用の本を明和七年刊かとしたが、明和五年と考えておきたい。

⑪ 注①前掲論文。

⑫ 本稿(一)。「千里山文学論集」29号所載。

⑬ 但し、安永三年正月に、明和九年正月刊「世間自慢顔」の再印本はある。「考証年表」一八〇頁。

⑭ 注①前掲論文。

⑮ 注②前掲稿。

⑯ 中村幸彦氏「大阪の断会」(中村幸彦著述集10)等。

〔付記〕

本稿をなすにあたり、武藤禎夫・多治比郁夫両先生のご教示を得ることができました。篤く御礼申し上げます。